**郡場　秋蝶 （こおりば・しゅうちょう）**

**１、プロフィール**

都々逸（どどいつ）・川柳の作者。東奥日報社社会部の記者。大正年間、「東奥日報」紙の柳壇選者として指導的役割を果たし、本県都々逸の振興に努めた。

＜生没＞

1887（明治20）年４月21日 ～ 1943（昭和18）年12月13日

＜代表作＞

「昨年の都々逸界―驚くべき進歩発達、一躍中央文壇独占」（「東奥日報」大正４年１月１日付記事）

＜青森との関わり＞

青森市栄町に生まれる。明治44年頃都々逸界に現れ、大正15年青森県を離れるまで、第一人者を占める。

**２、作家解説**

　都々逸の作り手・選者。（＊都々逸――七七七五調による短詩型の俗謡。江戸末期の天保年間に始まり、明治になって隆盛となる。）明治20年青森市栄町に生まれる。本名は徹（とおる）。兄に、後の弘前大学学長、寛がいる。東京の私立錦城中学校卒業後、仙台の第二高等学校へ進む。その後、高校を中途退学して帰郷。明治44年４月、東奥日報社に入社、社会部記者に配属される。その一方、因防庵秋蝶の雅号で都々逸・川柳を作した。

都々逸を始めた時期・契機は未詳であるが、入社以前の明治44年１月１日、14日の東奥日報紙に「秋蝶」選、募集都々逸が行われている。同年４月には同紙上で川柳の選も行っているが、以後、大正15年健康面の理由で青森県を離れるまで、本県都々逸のほとんど唯一の指導者として、向上と振興に努めた。

大正２年３年４年元旦の募集都々逸選などを初め、大正年間を通じて県下都々逸大会や文芸大会での選者を務める。大正７年頃、横田はまと結婚、３人の子供を設けた。また、秋蝶は気象測候の興味・知識も豊富で、本県の気候が自身の健康に合わないとの判断から、大正15年東奥日報社を退社、南洋庁（在パラオ、当時）に勤務。３年後帰国して、京都市役所に勤務。市史執筆に従事した。

昭和18年、京都の自宅で病気のため、57歳で亡くなった。遺骨は、青森市三内霊園に眠る。

裂いちゃ捨てれぬ思出ばかり添へぬ昔の日記帳（大９・６・22）